第二講「逆説」を読む　60分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「時の流れ」が河の流れに喩（たと）えられるとき、そこではつねに、不在の未来が現在へと流れ来て、現在がやがて過去というもう一つの不在へと流れ去るという事態が思い描かれている。わたしたちにとって河が流れとしてあるのは、川上から流れ着き、ようやっと姿を現わした川面（かわも）の漂流物を目前に眺め、やがてそれが去ってゆくこと、視野から消えてゆくさまをまじまじと見つめることによってである。その意味では、何かの到来もそうだが、とりわけ、あるものの消失の経験、離別の経験こそが〈時〉の移ろいを浮き立たせる。だから、つねに「いま」が(ア)フットウしている乳児には〈時〉はない。じぶんにとってなくてはならないもの、大切な人、そういうものがじぶんからむしり取られてしまうという痛い経験のなかで、ひとは何かの不在を思い知らされ、〈時〉の移ろいに感じ入る。消えたものへの思い、そこに〈時〉は訪れる。そういう意味では、時間を論じるときに、ひとはつねに何ものかの到来を待ち受けるこの「いま」、そして何ものか

の消失の起点となるこの「いま」というものを始点とするほかないようにおもわれる。

　未来という不在が流れ来ることも過去という不在へと流れ去ることも、それぞれ「まだない」と「もうない」として、「いま」という現在において意識されていることがらである。その意味で、「まだない」不在の未来もそのようなものとして語られるかぎりでは現在においてある。おなじ意味で、「もうない」不在の過去も現在においてある。そんなふうに「いま」（現在）こそが「時の流れ」の火床であると考えたのが、フッサール※の現象学の時間論である。

　では、その「いま」は流れをどのように感受しているのか。どのように駆動しているのか。まだない未来と、いまここにある現在と、もうない過去との関係は、「流れ」としてまるで一本の線のように結びあわせて語られるかぎりで、じつは現在（予期）と現在と現在（想起）の関係である。そう考えれば、なんと(A)時間は流れるのではないことになる。いいかえるとここでは、「流れ」を時間の外から「流れ」として眺める意識（観測点）じたいは時間的だとは考えられていない。だから「時が流れる」ということで問題なのは、流れている者が流れのなかで流れるままにそれを流れとして捉え（とら）、ひるがえっておのれをも流れるものとして捉える、そのような

時間意識のしくみだということになる。いってみればそれは、歌い終わった旋律が未だたなびきつづけ、さらにこれから口ずさむ旋律を予感しつつ、いままさに歌われている歌唱のようなものである。それをフッサールは、（それ自身が時間流である）意識による「時の流れ」の構成という問題として捉え返した。対象として意識の前で流れる時間ではなく、流れるものとしての時間が自己自身を流れるものとして構成するのはどのようにしてかという問いである。

「流れ」は、何かの移行として感受される。それはいまあるものが未だないものを含み、さらにいまあるものがもはやないものへとおのれを消し去ってゆく運動である。フッサールは「いま」（現在）を、そのように、いまあるものと、未だないもの、もはやないもの、この三つの①契機がたがいに含みあい、溶けあうような現象として捉えた。そしてそれを「いきいきとした現在」（Lebendige Gegenwart）と呼び、そこに流れることと立ちどまることとが同時に起こっているような時間の根源（Ursprung、まさに湧（わ）き出る泉である）となるあり方を見た。「流れる現在」とは、たえず「いま」でなくなる、つまりもうないものへと流れ去る「いま」のあり方であり、「立ちどまる現在」とは、まだない未来をたえずおのれのなかに呑み込むものというかたちで(イ)コウジョウ的に現在でありつづける「いま」のあ

り方である。「いま」として自己を同一的なものとして反復しながら、同時に「いま」でないものとしてたえず消え去る（自己が自己でなくなる、つまり自己を差異化する）「いま」のそのような②両義的なあり方に、(B)「時が流れる」ということの実質を見た。いいかえると、「時が流れる」というときのその移行性は、たえず滑り落ちてゆくこととつねに新しくあることとの二重性、つまりは現在が非現在へと移行することとして理解したのである。そして、つねにみずからであろうとしながら、たえずみずからでないものへとたえず自己を超えてゆくという、そのような動性こそ時間の推力であるとしたのである。「いま」をコアとして「時の流れ」を見るいわゆる現象学的時間論である。

(C)しかし、ここには決定的ともいえる二つの問題が潜んでいる。

一つは、「時の流れ」がこのように捉えられるにしても、その未来・現在・過去という三つの契機をたがいに含ませ、溶けあわせるようななにがしかの動性があるから時間が流れるのか、それとも時間が経過もしくは推移するそのなかで意識が「いま」を拠点として時間を「まだないもの」と「もうないもの」との関係として再構成するのか、という問題がそのまま残る。つまり、意識が時間の根拠なのか、それとも時間が意識の根拠なのかという問題である。とりわけこの問題が顕在化するのは、(D)未来というも

ののあり方をめぐってである。未来はフッサールが考えたように、現在が予期というかたちであらかじめ未来を呑み込んでいるというよりも、むしろ逆に、予期というかたちで描かれる未来はじつはそれをしばしば裏切るかたちで、不意に訪れるのではないかということである。そうだとすると、未来という非現在は、現在との連続からではなく、現在との(ウ)ダンゼツからも主題化されねばならないことになる。未来は現在という時点においてその到来が予期されるものではなく、あらかじめ描きようのないもの、不意を(エ)オソうかたちでわたしたちをとらえるもの、その意味でいかなる現在をも逃れ去るものとしてあるということになる。そうなると、「時の流れ」は「いま」という火床のなかで構成されるものではなく、もはや構成不可能な根源的事実としか規定しようがない。時間とは「まだないもの」が「いまあるもの」となり「いまあるもの」がそのまま「ないもの」に滑り落ちる移行そのものであり、「いま」に特権的な位置価があるというものではない。現象学の時間論はここでその限界に立ち到る。

　いま一つの問題は、フッサールが「いま」として捉えている現在がどのような幅をもったものなのかということである。フッサールは、現在を不在を呑み込んでゆく運動として捉え、未在と既在を含み込み、それと溶けあうような「時間の庭」というものを想定していた。そのかぎりで、現在

はそこから未来と過去とを区切る③分水嶺（れい）のような「点」としてあるのではなかった。音楽でいえば、次にすぐ聞こえてくるような音とともに、たったいままで聞こえていた音をもまだ現在につなぎとめている、そういうはたらきが「いま」の時間意識にはあるのであった。それをフッサールは「未来予持」（Protention）と「過去把持」（Retention）と呼んでいる。その二つが現在には含まれるというのである。だからこそ「いま」は「庭」をもつとしたのである。

　Protention/Retentionというのは意味（オ）シンチョウな語で、ともにラテン語のtentioという語を含んでいる。tentioとは「張り」もしくは「伸張」を意味する。「時間の庭」とはだから、「いま」というもののこの「張り」、この「伸張」の幅のことである。この幅を規定しているものは何か、という問題がここから出てくる。いいかえると、時間に過去・未来・現在という隈（くま）取りを与えるもの、時を区切るものが何かという問題である。

（鷲田清一『哲学の使い方』による）

※注　フッサール……ドイツの哲学者（一八五九〜一九三八）。現象学の創始者。

問一　傍線部（ア）～（オ）のカタカナの部分を漢字で記しなさい。

問二　傍線部①～③のことばの意味を説明しなさい。

問三　傍線部（A）とはどういうことか、問題文に即して説明しなさい。

問四　傍線部（B）とはどういうことか、問題文中から**一五字以内**で抜き出しなさい。

問五　傍線部（C）の「二つの問題」とは何か、問題文に即して説明しなさい。

問六　傍線部（D）についての筆者の考え方と、フッサールの「未来」の考え方の違いを問題文に即して**七〇字以内**で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

問一

(ア)

(イ)

(ウ)

(エ)

(オ)

問二

①	②	③

問三

問四

問五

問六

第二講 「逆説」を読む 解答

問一

（ア）	沸騰
（イ）	恒常
（ウ）	断絶
（エ）	襲
（オ）	深長

問二

①	ある事柄が発生するきっかけとなるもの。
②	一つの事柄が相反する二つの意味を持っている様。
③	物事の方向性がどうなるかの分かれ目。

問三

時間は不在の未来から現在へ、現在から不在の過去へと流れ去るものではなく、実は未来も過去もともに現在において予期、想起されるものであるということ。

問四

現在が非現在へと移行すること

問五

一つは、意識が時間の根拠なのか、それとも時間が意識の根拠なのかという問題である。もう一つは、未在と既在を含み込む現在がどのような幅を持ち、過去現在未来という時間を区切るものは何かという問題である。

問六

フッサールは未来を現在において予期しているものだとしているのに対し、筆者は現在における予期を裏切るかたちで不意に訪れるものだとしている。